

ドラマ化するスポーツジャーナリズム

——スポーツファンの熱狂を背景に

田中 麗

(君塚 洋一ゼミ)

目次

はじめに

第1章 観て語る『スポーツ』

1. スポーツ報道の移り変わり
2. スポーツの成立と人気の高まり
3. メディアが支配するスポーツ—「するもの」から「みるもの」へ

第2章 スポーツのドラマ化によるジャーナリズムの歪曲

1. メディアによる過剰な演出と利用
 - (1) 選手を「育てる」メディア
 - (2) スポーツ界のメディア依存
2. 「ヒーロー」としてのアスリート
3. メディアの知識と報道姿勢

第3章 ファンの欲望の構造とメディア報道との関係

1. メディアとスポーツファン
2. メディア側の要因
3. スポーツファン側の要因
 - (1) ドラマを求めるスポーツファン
 - (2) 亀田報道への反応から見る、3つのスポーツファン
4. メディアとファンの相乗効果

第4章 スポーツジャーナリズムの今後

1. 終わりに
2. 今後の課題

はじめに

2006年は、冬季オリンピックやワールドベースボールクラシック(WBC)、サッカー・ワールドカップなど、国際的なスポーツ大会が相次いで開催された。オリンピックでは女子フィギュアスケートの荒川静香選手が史上初の金メダルを獲得したり、WBCでは絶体絶命の状態から奇跡の優

勝を果たし、活躍したイチロー選手の一挙一動が大きな話題となった。また、惜しくも1次リーグで敗退したサッカー・ワールドカップにおいても、代表選手にサプライズとして選ばれた巻誠一郎選手や、今大会を最後に引退したヒデこと中田英寿選手に多くの関心が集まった。

このようなスポーツ大会中はもちろん大会の前後には必ず、雑誌や新聞で特集記事が生まれ、テレビでは特別番組が放送される。そこで、選手やチームの詳しい情報や選手にまつわるエピソードなどを紹介したりしている。わが国の人々のスポーツに対する関心は非常に高く、多くのスポーツファンは、メディアからこれらの情報を得ようとする。このように人々のスポーツに対する高い関心を背景に、テレビを中心とするマスメディアによって媒介されるメディアスポーツは近年、その存在感を増してきている。

こうしたわが国のスポーツ及びスポーツジャーナリズムは多くのスポーツファンによって支えられており、彼らのニーズに応える形で成立している。そのため、試合の結果や記録を社会に伝達する一方で、人々の関心を引き付けるため、ジャーナリズムは時に報道の範囲を超えてしまうことがある。スポーツ新聞等でよく目にする、選手を野次るような記事や過剰に感動をあおるような記事がその例である。これが歪曲、理想化、芸術化、そしてドラマ化である。このような傾向が強まり様々な「ドラマ」が生まれる一方で、今日のスポーツジャーナリズムの世界においては、スポーツやアスリートに対する現実的な分析や批評ができにくくなっていると言えるのではないだろうか。

本稿では、メディアにより、スポーツが一般的に「するもの」から「観るもの」に変化した背景を明らかにし、さらに「観る」スポーツがメディアによりドラマ化され報道されてしまうことで引き起こされる問題点を、スポーツの育成・発展と

いう観点から、メディア側の自由と責任、そしてスポーツファン側の責任という視点から考えていきたい。

第1章 観て語る『スポーツ』

わが国ではスポーツ観戦愛好者は6千万人、スポーツ市場規模は5兆5千万円、さらに300種に及ぶスポーツ専門雑誌、発行部数850万部以上のスポーツ新聞など、スポーツが日本社会に与える影響力は増大している。(注1) このようにスポーツはスポーツ観戦愛好者によって支えられており、彼らが自ら経験することのない、広く多様なスポーツの情報を得ようとする需要によって成立している。つまり現在では、実際にプレイするのではなく、見て語るスポーツが一般的になっているのだ。

1. スポーツ報道の移り変わり

スポーツを伝えるマスメディアには主に、新聞・ラジオ・テレビの3種類がある。新聞はスポーツが情報として発信された最初のマスメディアであり、競技の広報や結果の伝達という形で始まった。試合結果やチームの勝率、個人のデータなどの記録を伝えることを得意とし、また朝日新聞社の全国高校野球選手権大会などのようにスポーツ・イベントを主催し、その記事を掲載したりしている。一般紙のみならず、6紙あるスポーツ新聞も1日に850万部以上を売り上げ、スポーツメディアとして重要な役割を果たしている。

ラジオは新聞の次に現れたマスメディアであり、1940～50年代にかけて大きな役割を果たした。その特徴としては、新聞とは違いリアルタイムで情報を得ることが可能であることだ。これにより、実際に会場に足を運ばなくてもラジオを通して『観客』になることが可能となった。また、スポーツ界において放送権料という収入源を確保したのも、ラジオが最初である。

ラジオが音声のみなのに対し、テレビは映像により、選手の表情のアップやスロー再生、またアナウンサーや解説者による選手やチームの詳しい情報や解説などの演出を行い、会場ではなくテレビでなくては味わえない観戦をさせてくれる。こ

のようにしてテレビは、生の観戦に近づけるのではなく、テレビでしか味わえない観戦を作り出し、生で観戦することのできない人のための補助的な役割ではなく、人々をテレビを通してみるというメディアスポーツの虜にしていった。この結果、スポーツの放送権料は高騰し、スポーツビジネスの中心となった。

その他に、より専門性の高いスポーツ誌、近年急速に発展してきたインターネットなどがある。特にインターネットは、選手自身がホームページを持ったり、ファンが掲示板上で意見を交換したりなど、従来に比べ選手やファン側の意見・主張が直接発信される機会を増大させている。

2. スポーツの成立と人気の高まり

では一体、スポーツとは何なのだろうか。国際スポーツ・体育競技会によると、スポーツとは「遊びの性格をもち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対立を含む運動」と定義されている(注2)。またS・K・フィグラーとG・ウィテカーによると「楽しさ(fan)を本質とする自由でのびやかな『遊び』と、高度に競争的でシリアスな『アスレティクス』(例えばオリンピックやサッカー・ワールドカップのようなハイレベルの競技)との中間的な形態」と定義している。しかし定義に従うと、『アスレティクス』はスポーツではないということになり、このように考えるとスポーツを定義することはなかなか難しい。

そこでまずスポーツを歴史社会的に考えてみる。『文化としてのスポーツ』によると、ノルベルト・エリアスは、かつては「スポーツ」とは「気晴らし(disport)」という言葉とともに、様々な娯楽や楽しみをさすものとして広く使われていたと唱えている。その後18世紀の間にスポーツは「肉体の行使が重要な役割を果たす娯楽の特殊な形態」として広く用いられるようになり、19世紀後半から20世紀前半にかけて、サッカー・競馬・レスリング・ボクシング・テニス・ボートレース・陸上競技などが世界中に広がり、それとともに「スポーツ」という英語が特別な娯楽の総称として広く受け入れられるようになった。娯楽としてのスポーツの特殊性とはルールがあることであり、スポーツの本質が暴力を行うことよりもむしろ暴力

を見ることにあるという点だった。古代オリンピック競技のバンクラリーオンは、リングも制限時間もなしの何でもありの格闘技であった。ゆえに、古代オリンピックが「スポーツの偉大な範例」とは神話に過ぎず、私たちの感覚からすれば、とてもスポーツとは言えないものであった。また、近代オリンピックは近代の文化的発明品としてのスポーツのための祭典であったと言われている。(注3)

現在ではスポーツの中に社会の理想があると考えられている。それらを表す言葉が、「能力主義」「平和主義」「自助努力」「名誉ある敗北」等である。スポーツは、自由と平等、競争と連帯、自発性や主体性というものを両立させていると考えられている。その一方で、スポーツと政治やナショナリズムの結びつきが問題視されているのも事実である。ヒトラー政権下でのベルリンオリンピックがその良い例である。そのような中で、スポーツは本来の「遊び」としての要素が衰退し、次第にシリアスなものとなり、スポーツは単なる「スポーツ」の枠を超えるようになった。観客はスポーツから喜びを与えられ、精神的娯楽や満足を味わう。そしてスポーツは、その闘争の中に美しさまたはドラマ性を表現する。さらに新体操やフィギュアスケート、ダンス等の種目の様に、競技そのものの美しさや芸術性そのものを問われる競技も増大している。

わが国においては1986年に日本体育協会がスポーツ憲章を発表したことにより、競技団体の判断でアマチュアからプロ化・商業化への道が選択可能になった。これらのことが見て語るスポーツの始まりである。

3. メディアが支配するスポーツー「するもの」から「みるもの」へ

このように、社会における「スポーツ」の役割は、本来の姿から徐々に変容してきた。しかしこのことは、わが国のスポーツジャーナリズムに少なからず影響を与えている。『現代のメディアとジャーナリズム1 グローバル社会とメディア』によると、従来のマスメディアの機能は現場で起きたことの伝達、記録、評価・評論である。しかし、現在のスポーツジャーナリズムはその機能を十分に果たしているとは言いがたい。なぜならば「メディ

アはスポーツを娯楽化しドラマに変容させて、関心をもつ人の数を飛躍的に増大させてきた。」(注3)からである。『スポーツは誰のために—21世紀への展望』によると、今日ではマスメディアによって提供されるスポーツ情報は私たちのまわりに溢れ、人々は主体的な判断によってどのような情報の取捨選択も可能であるかのように感じている。しかしそれは錯覚であり、現実はある種の情報を押し付けられ、またスポーツそのものを受動的に受け入れなければならない事態に追い込まれているという。マスメディアはドラマ化を通して、実際のスポーツを主観的に構成し、娯楽的な操作や脚色、解釈を加えながら、「芸術」以上の魅力と好奇心を喚起しうる情報を私たちに提供している。

またスポーツニュースは一般のニュースと違い、重要性の高さを規定する基準は特に曖昧であり、どのように報じるかの決定は各社に一任されているため、面白さや新奇性などによって人々の関心を引けるかどうか重要となる。しかしこの人々の関心を引こうとする行動は時に報道の範囲を超えることとなり、それが情報の歪曲などにつながると考えられる。わたしたちはこのような情報社会の中で、メディアリテラシーの力を養っていけないといけないが、この歪曲という問題は「ドラマ化」と深く関わっている。

高校野球を例に考えると、メディアが選手の姿を純情、熱血、挫折、血と涙と汗などで表現し、感動物語として大量に情報を伝えることで、私たちの中に「高校野球」のイメージがつけられる。こうしてわたしたちは「芸術」としての高校野球に魅了され、メディアによるその「ドラマ化」によって感動を覚える。つまり、その観客もしくは視聴者であるスポーツファンの存在が、スポーツを「理想化」し、スポーツジャーナリズムを「ドラマ化」させて芸術的要素を強くさせていくことにつながるのである。

このように考えてみると、スポーツはメディアによるドラマ化によってますます「芸術化」と言える。それはつまり、“スポーツを観たい”“スポーツの情報を得たい”“スポーツの感動を味わいたい”という多くのスポーツファンの存在があるからだと考えられる。さらに現代のスポーツは

メディアなしでは考えられない。メディアの発達によって、スポーツファンは急激に増大した。実際、会場に行って試合を観るよりも、メディア、特にテレビを通して試合を観ることの方がはるかに多い。そして、テレビ側は視聴率を得るため、より興奮をあおり感動的に伝えるように様々な工夫を行う。つまり、実際に会場で試合を観るよりも、テレビを通して観た方がより興奮し、感動的になるように操作されているのである。

それだけではない。メディアはスポーツの競技時間やルールまでも変えてしまった。競技時間は、プロ野球の開始時間の30分繰り上げやアメリカンフットボールのハーフタイム短縮、NBAの試合時間変更、ルールに関してはバレーボールのラリーポイント制やテニスのタイブレイク制の導入などがその例である。また日本のメディアは、プロ野球チームやプロサッカーチームを所有している。さらに高校野球や高校サッカー、高校ラグビー等のスポーツ・イベントの主催や後援にも携わっている。

このようにメディアは情報をただ伝えるだけでなくスポーツを支配し、運営する側に立っており、メディアがスポーツに与える影響力は留まることを知らない。しかしスポーツファンの望む情報を届けるためにメディアは存在し、またメディアがスポーツを支配する立場にあるとしたら、それは本当の意味でジャーナリズムとして機能していると言えるのであろうか。

第2章 スポーツのドラマ化による ジャーナリズムの歪曲

1. メディアによる過剰な演出と利用

(1) 選手を「育てる」メディア

メディアがスポーツを支配するという観点で、一番分かりやすい例が、テレビ局と協会や選手との関係である。テレビ局は、元々プロレス中継など娯楽的要素を強くもつ番組を放送してきたが、例えば、そうした放送局のひとつであるTBSに関して最近話題になったことといえば、「亀田兄弟」だろう。ボクシング界において、いろいろな意味で今最も注目されているこの亀田三兄弟をTBSはデビュー以前から「最強兄弟」として追

いかけて続けた。そのことから一部では、亀田兄弟はTBSによって育てられたとさえ言われている。

亀田兄弟の試合は、当然、TBSで放送することになるのだが、2006年8月2日に行われた亀田興毅選手の世界戦で事態は急変する。それまで、TBSを始め様々なメディアで「最強」と謳われてきた亀田興毅選手が、このランダエタ戦では初回にダウンし、その後も苦しい展開が続いたように見える試合内容であった。しかし結果は亀田選手の判定勝ち。亀田選手は世界チャンピオンの座に輝いた。この結果に対して各メディアは亀田批判の報道をする。当日の各新聞社のホームページの見出しだけを見ても以下の通りである。

- ・ 亀田、初回ダウン・終始劣勢…残る疑問 (asahi.com)
- ・ 亀田興毅：勝利のアナウンスに驚きの声…横浜アリーナ (MSN 毎日インタラクティブ)
- ・ 劣勢の末の意外な勝利 亀田、苦戦糧にできるか (スポーツナビ)
- ・ 史上に残る不可解判定・亀田、後味悪い王座獲得 (NIKKEI NET)

この「亀田騒動」は連日メディアを賑わし、様々な議論を呼んだ。メディアの報道が過熱するに伴い、テレビ局が放送した街頭インタビューでは人々が「あれはどう見ても亀田の負けだった」と語る声が強まり、またインターネットの掲示板では「八百長（この表現は多少本来の意味とニュアンスが違っているのだが…）」や「マスコミ（特にTBS）の金稼ぎ」という書き込みが続出した。またランダエタ選手の出身であるベネズエラの日本大使館のホームページには、ランダエタ選手を励ます約300通のメールが届く、などといった異例の現象すら起こった。この「亀田騒動」は、マスコミ、特にTBSが亀田兄弟を過剰に演出してきたことが大きな問題となっているのではないだろうか。

つまりマスコミが視聴率欲しさに亀田選手を「最強」と仕立て上げることによって、視聴者はそのイメージを亀田選手に抱く。つまりボクシングにあまり関心のない人々にも、亀田選手は最強

の存在として認知されるのだ。この時点でマスコミは、一次的な選手の利用をしてきたと言える。そして今回、このような微妙な判定によって、そのイメージが崩れたことを逆に利用し、今度は亀田批判を過剰に行うことで、人々の関心を引き付ける。これが二次的な利用である。しかしそれだけではない。このようなマスコミの報道に視聴者が影響されるのだ。こうしてそれまでの亀田＝最強から、亀田＝作られたヒーローというイメージに変更され、人々の中にそのイメージが定着する。街頭インタビューで、ボクシングにあまり関心のなさそうな人々が、いかにもボクシングを知っているかのように亀田選手を批判していたのはそのためである。

この試合は、手数が多く試合を支配しているように見えるテクニクを持ったランダエタ選手と、手数は少なかったものの有効打の多かった亀田選手との闘いであった。現在のボクシングの採点法は各ラウンドどちらかに必ず10ポイントを付けなければいけない仕組みになっている。ゆえに、そのラウンドが両者同等の内容であっても、必ず優劣を付けなければならず、有効打数を重視するか手数を重視するか等の判断は、3人いるジャッジによって様々な結果になると考えられる。よって、明らかにランダエタ選手優勢のラウンド以外を亀田選手がとっていたとすると、今回のような判定は在り得たと考えられる。しかしながら、この現在の採点法について説明するメディアはごく少なく、ボクシングにあまり詳しくない視聴者は、有効打の数は別として一見手数の多く、試合を支配しているように見えるランダエタ選手が勝っているように感じ、今回の騒動に繋がったのではないだろうか。メディアは、「疑惑の判定」と騒ぐなら、このような基本的なことをきちんと説明した上で報道すべきであったし、その解説がしっかりと行われていたとしたらここまでの騒動は起きなかったのではないだろうか。

テレビ局は、スポーツや選手を「育てる」立場にあるが、現在のように短期的な話題づくりや売り上げだけを追求し、コンテンツとして育てることより、新しい流行を次々と生み出すことに熱心な姿勢のままでは、本当の意味で「育てている」とは言いがたい。今回の報道では、亀田選手本人

に疑惑の目が向けられることも多かったが、本当に批判されるべきは、亀田選手を取り巻く、ジムやマスコミ、スポンサーなどの関係者やボクシング業界だったのではないだろうか。

(2) スポーツ界のメディア依存

メディアとボクシング界は亀田兄弟を特別扱いしている。自称「浪速の弁慶」の大毅選手のデビュー戦では、入場の演出のために数百万円をかけ、弁慶伝説に由来する五条大橋を制作したTBS。またKO勝利後の歌のパフォーマンスを許しているボクシング界。元世界王者で東日本ボクシング協会副会長の具志堅用高氏によると、日本ボクシングコミッション（JBC）に歌のパフォーマンスを辞めさせるように言ったところ、「テレビ局の意向だから」と言われたという。

また、興毅選手に関しては、これまで成績の悪いタイ人の選手を始め、弱い外国人選手としか戦ったことがないにも関わらず、日本ランキングや東洋太平洋ランキングに亀田選手の名前を並べたJBCにも問題がある。今回の相手、ランダエタ選手にしても、本来はミニマム級の選手であり、元々フライ級の選手である亀田選手とは2階級の差があり、本当の意味でフェアに戦えるとは言いがたい。さらに言うと、両者共ライトフライ級での試合経験はないにも関わらず、同階級の王座を争うということにも疑問が残る。本来ならばもっと時間をかけて、実力を持った様々な選手と対戦し、力をつけていくべきだが、メディアやジム、協会の都合上そういうわけにはいかなかったのだろう。

亀田選手は協栄ジム所属であるが、「協栄ジム」「八百長」と言えば、今回の亀田選手と同様、過去に世界ジュニアバンタム級王座決定戦で王者になったものの、疑惑の判定と言われた鬼塚勝也選手が存在がある。初防衛戦でも防衛を果たしたが、またもや疑惑の判定と騒がれ、それは「協栄マジック」とすら言われた。その世界戦を放送したのがTBSである。一部ではその「協栄マジック」を亀田選手が受け継いでいるとも言われている。鬼塚選手の時と同じようなことを繰り返しているTBSと協栄ジム。鬼塚選手の時にあれほど騒がれたにも関わらず、今回また同じような事態

が起こっており、TBSとジム側は結局その姿勢を改善していないと考えられる。

このようにメディア同様、ボクシング界も亀田兄弟をまるで救世主であるかのように扱っている。つまり、低迷していたボクシング人気の復活を亀田兄弟の話題性に託しているのだ。実際に亀田兄弟の存在によりボクシング人気は復活したと言える。ボクシングは、一般的に圧倒的に男性ファンが多いスポーツであると言われているが、亀田兄弟がデビューして以来、会場に女性ファンの姿が急激に増えた。亀田兄弟の試合には女性専用シートが用意されているほどだ。しかし、このまま実力のない選手と戦い続け、今のままの挑発的なパフォーマンスを続けていては、亀田人気はすぐに冷めてしまう。亀田兄弟の人気・話題性・スター性はボクシング界にとってプラスであることは確かである。であるならば、メディア同様、ジムを始め、ボクシング界も亀田選手に対する扱いを見つめなおし、「育てていく」ことが必要である。

以上のように考えると、ボクシング業界もメディアに依存していると言える。今回の亀田騒動が起こった原因のひとつにボクシング業界のこうしたメディア依存があったと考えられる。また北京オリンピックでの競泳や体操の決勝がアメリカのTV放送に合わせるため、午前中に行われるということも、国際オリンピック委員会（IOC）のメディア依存から生じる問題であり、スポーツ業界も今後のメディアとの関わり方について考え直していく必要があるだろう。

2. 「ヒーロー」としてのアスリート

現在の日本水泳界で最も有名な選手と言えば、やはり北島康介選手だろう。アテネオリンピックで金メダルを獲得し、そのときのセリフ「超気持ちいい!!!」がその年の流行語となった。それまで異様なほどイアン・ソープ選手一色だった日本のメディアを、再び日本の選手に目を向かせるきっかけとなった選手である。

このように世界的トップスイマーで、国内では当たり前のように無敗であった北島選手だが、2005年4月の日本選手権で今村元気選手に敗北することになる。さらにその2ヶ月後に行われたミッションビエホ国際大会で、再び今村選手に敗

れ、約1年後の日本選手権でも北島選手は4位に終わっている。そのときの各紙の見出しは以下の通りである。

ミッションビエホ国際大会（2005年6月）

- ・男子200メートル平、北島破れる 優勝は今村 競泳のミッションビエホ国際大会（2005年6月20日 朝日）
- ・北島 二百平でまた今村に敗れる（2005年6月20日 スポニチ）
- ・100メートル平でも北島敗れる 競泳のミッションビエホ国際大会（2006年6月20日 朝日）
- ・北島 また今村に“予想外”の敗戦（スポニチ）

日本選手権（2006年4月）

- ・北島4位どまり、200平、木村が初V（2006年4月21日 日経）
- ・北島、ラスト50メートルの屈辱、「情けないレース」（2006年4月21日 日経）
- ・北島、200平で失速4位 去年3位 雪辱誓ったはずが…競泳・日本選手権（2006年4月21日 朝日）

これに対し、以下はそれ以降の北島選手に関する新聞記事の見出しである。

- ・日本記録・北島VS世界記録・ハンセン 男子平泳ぎ 水泳・パンパシ、17日開幕（2006年8月15日 朝日）
- ・100平で3位北島、復活序章 Vハンセンが刺激 水泳パンパシフィック（2006年8月20日）
- ・完全復活へ、北島手応え アジア大会へ始動 水泳（2006年9月27日 朝日）

このように、約1年間北島選手は敗戦が続いた。周りの選手が実力をつけ、今や平泳ぎは北島選手だけではないことが証明されてきているにも関わらず、このように見てみると、あくまでも「北島が負けた」という記事になっていることが分かる。何度今村が勝っても「今村が勝った」という記事にはならない。2006年の世界選手権以降の記事を見ても、あくまでもメディア側は水泳界のヒー

ロー＝北島康介にしておきたいと見える。確かに北島選手は水泳界で最も知名度が高いし、水泳に詳しくない人でも北島選手のことは知っているという人は多いだろう。しかし実際には、レースをみて分かる通り、水泳界には北島康介のほかにも実力者は多い。アテネオリンピックで北島選手と同じく金メダルを獲得した柴田亜衣選手や、銀メダルの山本貴司選手、銅メダルの森田智己選手、中西裕子選手、中村礼子選手等である。だが、メディアが北島康介主体に報道することで、その他の選手の存在はいつまで経っても認知されにくい状況に置かれている。そのため「北島負けた」という、見出しも内容も北島主体の報道になる。このままでは、北島選手が本当に第一線から離れたとき、水泳界の「ヒーロー」はいなくなる。メディアが焦点を当てる人物が不在になり、それが水泳人気の低迷につながるとも考えられる。それはメディアの危機であり、水泳界の危機でもある。

イアン・ソープ人気絶頂の時、当時の世界水泳やオリンピックで日本のメディアは、イアン・ソープ選手ばかりを取り上げていた。世界水泳のキャスターを務めていたある女性タレントは、日本人の選手そっちのけで、「ソープかっこいい!!」の連呼であった。実際にイアン・ソープ選手と同じレースの同じ組に日本でトップの藤田駿一選手が出場していたが、実況を始め、藤田選手が存在が取り上げられることはあまりにも少なかった。その放送を見ていた水泳選手やファンの多くが、イアン・ソープ選手主体のそのメディアの姿勢にうんざりし、中にはメディアに対して不信感を抱く者も少なくなかった。

この時のイアン・ソープ一色の報道は、数年経った今でも、多くの水泳選手の間で「あの時のメディアはひどかった」などと語り続けられている。このままでは、イアン・ソープの時のような事態にもなりかねない。そのことも踏まえ、もっと北島選手以外の日本人選手に目を向けた報道もしていくべきなのではないだろうか。

3. メディアの知識と報道姿勢

亀田兄弟、北島康介選手に共通して言えるメディアの姿勢は、彼らに頼りきってしまっているということだ。認知度の高い彼らを題材にすること

で、「話題性」だけで単純にファンを満足させる方向に偏りがちになっているのではないだろうか。代表的なスポーツ紙のひとつ『デイリースポーツ』は、社是を「スポーツの振興と、娯楽の健全化を通じて国民の文化向上につとめる」と定めている（同紙ホームページより）。『デイリースポーツ』といえば、イコール「阪神」といったイメージが強いが、実は東京スポーツと共に「プロレス2大紙」と呼ばれるほど、プロレスを中心とした格闘技に力を入れてきたという歴史がある。

そのような『デイリースポーツ』を対象として、亀田兄弟の試合を始め、プロ野球はもちろん、ディープインパクトが凱旋門賞に挑戦することが明らかになったり、サッカー・ワールドカップの代表に誰が選出されるのかなどさまざまなスポーツが話題になっていた、2006年5月4日～11日の期間での亀田兄弟についての記事を見てみる。この期間は、亀田兄弟以外のボクシングの試合が行われており、その比較の為、この期間を取り上げる。

この期間で亀田兄弟の話題が取り上げられたのは、4日、5日、6日、7日、9日、11日分である。5日が兄弟の試合だった為、当日とその前後の記事を排除して見てみる。7日分は終面一面を使つての「丸太&陶芸トレヤ」という記事で、9日は5日の試合の視聴率についての記事、11日分は終面での「これが亀田家の山ごもり」という記事を掲載している。一方でこの期間、他にとりあげられたボクサーと言えば、8日の眼か底骨折の疑いのあるイーグル京和選手と、10日にスパーリングについての記事が載せられた長谷川穂積選手の両世界チャンピオンについて、あとはあまり有名ではない選手の引退と勝利に関してなどだけである。

調査結果は以下の通りである。

(表1『デイリースポーツ』のボクシング関連記事に占める各選手の記事量[見出し, 写真等除く])

	亀田兄弟	イーグル	長谷川	その他	全体
5月7日 (日別の割合)	1442字 (76%)	465字 (24%)	—	—	1898字 (100%)
5月8日	—	375字 (100%)	—	—	375字 (100%)
5月9日	1773字 (82%)	—	—	396字 (18%)	2169字 (100%)
5月10日	—	—	330字 (49%)	341字 (51%)	671字 (100%)
5月11日	1471字 (100%)	—	—	—	1471字 (100%)
総量	4686字	831字	330字	737字	6584字 (100%)
全体に占める比率	71%	18%	—	11%	100%

このように亀田兄弟の記事がボクシング関連記事全体の約71%を占めていることが分かる。また亀田兄弟がいずれの記事もカラーページで取り上げられているのに対し、その他の選手の記事は中面の小さな記事として掲載されている。ちなみに6日はイーグル選手のWBCの防衛戦であったが、その試合内容についてはほとんど触れられていない。このように、試合による怪我やスパーリングという「スポーツ」に直接関係のある内容にも関わらず、陶芸をしている亀田兄弟の方がニュース価値が高いと判断されていることが分かる。「おもしろい」ことばかりを取り上げ、本質的な部分は二の次になっていると言える。一時期、サッカーの話題が出るたびに、「ベッカム」「ベッカム」と、ヘアスタイルやファッションなど、試合内容に直接関係の無いことについて、過剰に騒がれていたのも同様の現象である。

また、記者自身がそのスポーツに関する知識を持ち合わせていないという問題もある。北島康介選手に関する記事を見て改めて思ったが、「スポーツ」を書いているというよりは、「人間」を書いている記事が圧倒的に多かった。レースの内容を伝えるのではなく、本人やコーチのコメントが大半を占めているように感じた。これは記者自身がそのスポーツに関する知識を持ち合わせていないため、実質的な批評が出来ないという面と、コメントや選手の様子をドラマ仕立てに伝えたほうがおもしろく、分かりやすいといった演说的な面との2つが作用している。

以前あるテレビ番組で水泳選手の特集を放送し

た際に、「1秒でも記録を更新してもらいたいですね」とあるキャスターが言っていたことが印象に残っている。しかし水泳は0.01秒を競う競技である。0.01秒を縮めることにどれほどの努力が必要であるか、そのことを知っている人なら決して言うことのできないセリフだ。このことに表れているように、日本のメディアはまだまだスポーツに対する敬意が薄い。またスポーツ番組を見てみると、スポーツに関する知識を全く持っていない女子アナやタレントがキャスターやレポーターとして出演・取材をしている場面を目にするのもそのためだ。スポーツを報道するための基本的な部分が抜けており、企業の姿勢から改善していく必要があるだろう。

亀田兄弟をデビュー以前から密着し、「最強兄弟」としてのストーリーを築き上げようとするTBSと協栄ジム。ゆえにタイの弱い選手や軽い階級の選手ばかりと戦わせ、KOやTKOの場面をより多く作り出し、視聴者に「亀田最強」と思い込ませ、印象付ける。また北島選手を水泳界のヒーローとして扱い、彼自身だけの成功と挫折を描くことで、まるで北島選手しか実力者がいないかのように見せる。どちらの例にしても、他にも実力者は多々いるにも関わらず、一人の選手をヒーロー物語の主人公として描くことで、他には実力者がいないかのようにメディアによって演出されていると言える。

ボクシングに関して言えば、亀田興毅選手が世界王者ということは知っていても、日本に一体何人の世界王者がいるかを答えられる人はかなり少ないだろう。日本が抱える世界王者の一人に、最も争いが熾烈と言われるWBCバンタム級王者の長谷川穂積選手がいる。バンタム級を14度防衛中のウイラボン選手を2005年4月に下し、その後の再戦でも完璧に勝利し、ウイラボン選手を「伝説の男」にした選手である。この長谷川選手が2006年11月13日に2度目の防衛を果たした。しかし、この試合を1面扱いしたのはスポーツニッポン1紙だけであり、しかも1ページだけであった。それに対し亀田選手の場合は多くのスポーツ紙が一面に取り上げ、さらに3ページ程度のスペースを費やしている。実力・実績は、明らかに長谷川選手の方が格上であるし、試合内容も

長谷川選手の方が素晴らしいものであったのは間違いない。これではスポーツや選手に対する客観的な分析や評価が正確になされているとは言い難い。

先日引退を表明したサッカーの中田英寿選手、巨人軍退団を表明した桑田真澄選手は、いずれも自身のホームページでその旨を報告した。その理由は両選手共に、マスコミを介すると伝わりにくいということだった。このようにスポーツ選手自身もマスコミにより、自身が歪曲されたりドラマ化されて伝えられることを敬遠しているように感じられる。この事態をメディアは深刻に捉えていくべきである。

第3章 ファンの欲望の構造とメディア報道との関係

1. メディアとスポーツファン

現在わが国では、一部ではスポーツジャーナリズムは存在しないとさえ言われている。日本のスポーツ界はメディアに支配されているため、組織のあり方の批判やどのような組織に改革すべきか、またどのような運営がなされるべきか、といった意見を述べる「場」が存在しない状態に陥っている。つまり、マスメディア全体としてスポーツに対する敬意が希薄であっても、それを正す機会がほとんどないのである。このことはスポーツやスポーツ選手をまるで消耗品のように扱っているということの表れである。

そこで、スポーツを「育てる」という視点に立ち、メディアとスポーツファン側の要因について考えてみる。

スポーツファンはいくつかのタイプに分けることが出来る。例えば身体論的に考えると、ひとつは元々競技として「スポーツ」をやっていたような専門的知識を持つコアなファンで、つまり身体と同化することのできる人たちである。もうひとつは競技に対する知識は薄くとも娯楽として「スポーツ」を楽しむファンで、例えば「応援する」という行為自体が快樂かつ最大の目的であったり、そのスポーツをやったことのない人たちである。前者はメディアによる感動を過剰にあおる演出に嫌気が差している傾向にあるが、後者は逆にメディアに依存し、またドラマを求める傾向にあ

る。なぜなら身体と同化することができず、そのプロセスを楽しむ事が出来ないからである。ゆえに、プロセスよりも、その裏にあるエピソードを求め、楽しむのだ。ハンカチ王子の人気やにわかサッカーファンと呼ばれる人たちがその例である。比率としてはメディアによるドラマ仕立てのスポーツを求める後者のファンの方が圧倒的に多く、そのようなファンの存在がメディアによるドラマ化を助長すると言える。

この章の後で述べるが、こうした視点に立ち、亀田兄弟に関してインターネットや掲示板の調査を行った結果、3つのタイプに分類することが出来た。

2. メディア側の要因

スポーツ・イベントやスポーツ報道に、競技に関する知識の薄い人々を引き付けるためには、対戦相手の一方の選手やチームに感情移入させること、また興味を惹く何らかの物語が必要である。例えばワールドカップやオリンピックなどの国際大会では、メディアは日本びいきの報道や実況を行い、ファンが無意識に一方に肩入れし応援するように仕向ける。そして試合内容以外のなんらかの感動的なエピソードを添える。こうしてメディアはスポーツファンの欲望に合わせ、よりドラマ化した報道を行う。

先日行われた箱根駅伝で、ある選手が走っている最中に、その選手が実は難しい持病を抱えていることを紹介したり、全国高校サッカー選手権の決勝では、盛岡商業高校の監督がガンを乗り越えて決勝まで進んできたことなど、直接試合に関係の無いことをしつこくうちに紹介していたのはそのためである。この中継を見ていた人の多くは、このようなメディアの演出により、無意識に盛岡商業を応援するようになっていたのではないだろうか。このようにして、メディアはその競技に関する知識の乏しい人々の関心を引き付けるのだ。

3. スポーツファン側の要因

(1) ドラマを求めるスポーツファン

スポーツの発展という視点で考えた時、メディアに依存するスポーツファン側に要因があるとすると、それはスポーツやその背景にあるドラマ性

や感動を求めすぎている点、そして無意識にそれらの情報を消費してしまっている点である。

スポーツは筋書きの無いドラマだとさえ言われている。日常生活で感動に飢えている人々は、スポーツの中に感動を求める。つまり、熱血、挫折、血と涙と汗など、普段自分自身では味わえない感動を文化装置としてのスポーツに求めているのだ。ゆえに、例えば2006年3月に行われたWBCで日本が優勝した際には、当時話題となったイチロー選手の発言を、「イチロー語録」として各スポーツ紙が記事にしたが、人々はこのイチロー選手のコメントに引き付けられるという現象が起こる。

もちろんスポーツは社会や人生のメタファーとしての役割を持っており、「さまざまな教訓的な物語がスポーツに読み込まれるようになった」(注4)ため、人々がスポーツの中にドラマを求めることは必然的なことかもしれない。しかし、シュートの美しさなどプレイそのものに感動を覚えるのであれば何の問題もないが、多くのスポーツファンの言う感動とは、感動物語のようなメディアを介してある種「つくられた」感動のことである。人々はシナリオのある映画や小説と同じような感動、もしくはそれ以上にリアルな感動をスポーツの中に求め、まるで自らが体験しているかのような感動を味わうことを過度に期待する傾向にある。プレイそのものに対する期待ではなく、その背景にあるエピソードなどのドラマ性に過剰に期待し過ぎているのである。

この傾向は、先に述べた通り、どちらかという競技としてのスポーツにあまり詳しくないスポーツファンによく見られ、メディアは絶対数として多いそちらのファンに焦点を当てた報道を行う傾向にある。スポーツには文化装置としての役割があるため、人々がスポーツの中に感動やドラマを求めることは、一概に悪いこととは言えない。しかし、スポーツの発展という意味では、人々のその過剰にドラマを求める行動は、スポーツそのものに対する正しい理解を妨げる面があるのではないだろうか。

(2) 亀田報道への反応から見る、3つのスポーツファン

スポーツファンの中には、純粹に感動を求めるファンだけでなく、アンチファンという存在もある。こうしたファンの意識や見解を収集し、どのようなタイプのファンが存在するかを調べるため、亀田兄弟についてのブログや掲示板を抽出し、それらへの書き込みを分析した。これを元に、スポーツファンの声を分類すると3つのタイプに分けることが出来る。

調査概要

・調査対象

インターネットの検索条件：YAHOO! JAPANの検索サイトでキーワード「亀田興毅」を入力

検索サイト（ブログ）の抽出条件：上位60件中、新聞社などのWEBサイトは除き、掲示板や個人的なホームページ、ブログから抽出

・発言（書き込み）の抽出方法：

インターネットで個人の書き込みを検索
「試合内容・実力について」
「ボクシング界・ジムについて」
「メディア（主にTBSについて）」
「発言・パフォーマンスについて」
の4つのテーマについてのコメントを抽出

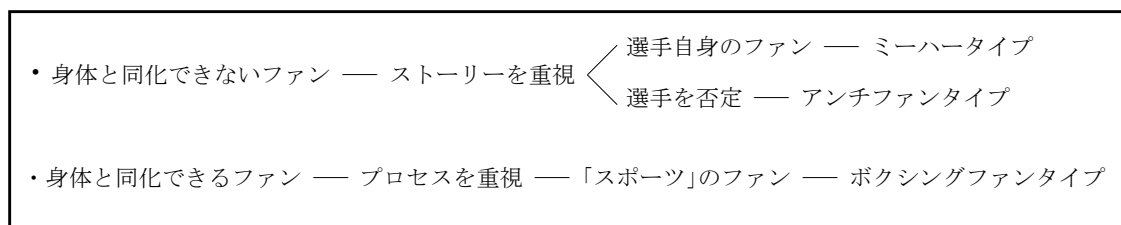
一番多いタイプが亀田兄弟を過剰に批判し、その行為自体を楽しむアンチファンタイプである。このタイプはマスコミの報道やどこから仕入れたのか定かではない「裏事情」にやたら詳しく、マスコミに都合よく便乗したり、批判したりを繰り返すといった特徴がある。

次によく見られるのがミーハータイプのファンである。女性に多く、ボクシングが好きというよりは亀田選手自身のファンであり、「亀田選手カッコいい」や「親子愛に感動」などと言っているタイプである。

最後にボクシングファンタイプである。会場に直接足を運ぶような、いわゆる熱心なボクシングファンのことであり、他の2タイプのファンと決定的に違う点は、ボクシングという「スポーツ」

(表2 亀田兄弟に関するスポーツファンの主な発言一覧)

	A.アンチファン	B.ミーハー	C.ボクシングファン
試合内容・実力について	「八百長」「対戦相手は嘸ませ犬ばかり」「反則」「初めから結果は決まっている」などといった、あまり根拠のないコメントが多い	「やっぱり強かった」「亀田最強」「信じていた」などといった意見が多く、具体的な指摘はない	「パワーはある」「精神力はある」「人気に似合った実力があるかは微妙だが、素質は持っている」「実力がよく見えて来ない」など、分析的なコメントが多い
ボクシング界・ジムについて	「ジムの陰謀を感じる」や「協栄マジック」「金の力」など、「黒い影」の存在を指摘	特にボクシング界やジムに対してのコメントはないことが多い	「対戦相手やランキングなど、本人ではなくボクシング協会に問題あり」や中には「採点法を改善すべき」といった意見もある
メディア(主にTBS)について	「試合までの演出が長過ぎる、どうでもいい」「TBSの金稼ぎ」など演出に対して、また「裏事情」に対して過剰に否定	「努力する姿が感動的だった」「ヒューマンストーリーや練習姿など、中継の2時間半かなり楽しめた」など肯定的な意見	「TBSの育て方に問題がある」「演出の方法などの中継の仕方に問題あり」
発言・パフォーマンスについて	「親子共に礼儀がなくなっている」「これぞ日本人の恥」など全面的に否定	「家族の絆に感動」「(野球の)新庄選手に通じるサービス精神」など、肯定的な意見の他に、「本当に敬語で話す亀田が見たいのか」といった意見もある	「今のままのパフォーマンスを続けているは、人気は続かない」「過剰な挑発行為は慎むべきだ」といった冷静な意見



(図1 亀田兄弟に関するスポーツファンの声の系統)

が好きで、メディアや周囲に踊らされることなく、冷静にボクシングを分析しているということである。

ミーハータイプはもちろん、アンチファンタイプもメディアによる過剰な演出やドラマ性を求める傾向にある。ミーハータイプは素直にその報道を受け入れ、感動を求める。またアンチファンタイプは、メディアがドラマ的に伝えれば伝えるほど、それに対する批判などが出来るので、ある意味ではメディアによるドラマ化を求めていると言える。

彼らは純粋に感動を求めるファンとは違い、ある対象を否定することに快感を感じるタイプのファンである。分かりやすく言えば、亀田嫌いの亀田ファン、北島嫌いの北島ファンということになる。仮に彼ら本人が否定したとしても、その対象のファンであることには変わりない。実際に、彼らはどのタイプのファンよりも、その選手に関する情報や報道に詳しいといった傾向にあり、メディアに便乗し依存しているため、そういった意味でメディアによる演出を求めていると言える面も持っているのではないかと。

このように、ミーハータイプのファンとアンチファンは一見相反するように見えるが、メディアに依存し、それに便乗するという点では同じである。つまり、肯定するか否定するかの違いだけであって、両方ともメディアによる競技面以外の報道に非常に関心が高く、注目している。もちろん、その選手が好きといったミーハータイプのファンの存在は、一時的である可能性は高いがその競技の人気向上に繋がるし、アンチファンタイプのように、例えばメディアにより安易にヒーロー扱いされている選手やスポーツに対する否定的な意見も必要であるし、そのことが話題になることもある。しかし彼らの行動や意見は、彼ら自身に対してはストレス発散であったりなどの「文化装置としてのスポーツ」として機能しているかも知れないが、一時的ではない本質的な部分からの選手の育成やスポーツの発展のために機能しているとは言いがたいのではないだろうか。

これまで述べてきたように、ミーハータイプは感動的なエピソードはもちろん、選手に関するどのような情報でも求めようとする傾向にある。とにかく、選手に関する情報であれば何でも得たい、それが感動的であればなおさらである。このような何でも得たいとするファン側の思いがメディアによるドラマ化を進めると考えられる。また、アンチファンタイプはとにかく何でもかんでも否定したがる傾向にある。しかし彼らはスポーツに興味がないのではなく、「嫌い」とは言いながらもそのスポーツや選手に関する情報を求め、かなり詳しいことが多い。そういった意味で彼らは立派な「ファン」であると言える。彼らは必ずしもメディアによるドラマ化を求めているわけではないが、感動的なエピソードや話題性のある情報は彼らの絶好のターゲットであり、無意識のうちにそのような情報を求めてしまっているのではないだろうか。ゆえに彼らの存在もまた、センセーショナルリズムを増大させるきっかけとなっていると考えられる。

それに対し、ボクシングファンタイプはもちろんボクシングの中にドラマ性を求めるが、ミーハータイプのように、メディアによって提供される情報を何でもかんでも鵜呑みにするわけではない。むしろ感動を自分自身で見つけ出すことが出

来る。また、勝敗だけにとらわれず、そのプロセスを楽しむことが出来るのである。このようなファンは試合内容を事細かに分析するような、本質的な報道を求める傾向にある。

ドラマを求めること、それもスポーツの持つ機能の一つであるが、しかし何でもかんでも受け入れ、求め過ぎると、現実的な評価が出来なくなる。またアンチファンのように、否定的な意見も時には必要ではあるが、メディアによる報道が過激になればなるほど、非難も過激になり、ある意味でメディアに踊らされてしまっていると言えるし、選手を中傷することにも繋がるといった問題点もある。そういった意味では、そのスポーツ自体が好きという「スポーツ」ファンタイプのファンは、スポーツを育ててくれる貴重な存在であると言える。

4. メディアとファンの相乗効果

私たちがロナウジーニョのプレイひとつに感動するように、感動的なプレイにはメディアが多くを語らなくとも、そこにドラマが生じ、その感動はおのずと伝わる。しかし、スポーツは筋書きのないドラマであり、いつ起こるか分からないそのプレイに委ねているだけでは、ファンを引き付けることは難しい。ゆえにメディアは予防線を張るように、ドラマを見つけ出し、伝える。

それゆえ、人々の関心を引き付けたいメディア側は、スポーツファンの期待に答える形でよりドラマ性を重視した報道をする。ゆえに対戦相手のどちらかに肩入れしたような実況や解説をしたり、過剰に苦勞話を加えたりするのである。こうしてファンが求めるから、メディアがそれに応えるという図式が誕生する。スポーツの育成を視野に入れた時、スポーツを単なる消費財として扱うメディア側と、過剰にドラマ性を期待するファン側との双方に要因があり、その需要と供給の相乗効果によりスポーツ報道が過度にドラマ化し、時には歪曲に繋がってしまう。これでは、人々をその「スポーツ」に、またそのドラマに引き付けることは出来ても、本当の意味でスポーツを育てるとは言い難い。

もちろんスポーツの中にドラマ性があるのは当然であり、人々がそのドラマ性に感動を受けるの

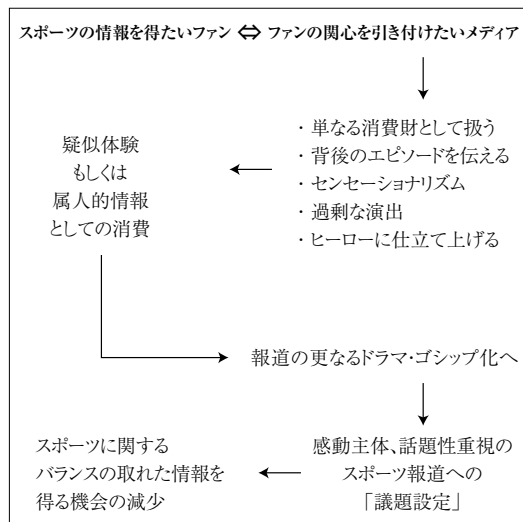
は必然的なものなのかもしれない。しかし問題なのは、映画や小説などと同じようにメディアがその感動を意図的に作り出し、商品化された「感動」を人々が求め、引き付けられて動かされているという点である。映画や小説などのエンターテインメントならばそれで良いが、スポーツ報道はあくまでもジャーナリズムである。

もちろんスポーツは一般のニュースとは違い重要度の基準が決められていないため、いかに面白さで人々の関心を引けるかが重要である。しかし、それが過剰になると、オリンピックなどでの「金確実」などの何の根拠も無い活躍予告により、選手に余計なプレッシャーを与えてしまい、コンディション作りを困難にさせてしまうこともしばしばある。その上、結果を出せなかった場合には、手のひらを返して選手をバッシングする。その報道をみた視聴者は、そのマスコミの報道を自分の意見として受け入れてしまい、選手に対し期待を裏切ったと怒りや冷たい目を浴びせる。それをメディアがまた増大させる。実際には一般の人たちより何倍も優れているにもかかわらず、そのプレイが出来る、もしくは記録が出て当然だと思込んでしまっているのである。これもまたメディアとファンの相乗効果だと言える。

このように、メディアがスポーツを過度にドラマ化する原因のひとつに、スポーツファンもしくは視聴者、つまり「消費者」の存在があるからだとと言える。「ファンが求めるから」という理由でスポーツジャーナリズムを過度にドラマ化し、平気でジャーナリズムとは言いがたい形に変えているメディア側にも問題があるが、その現象を違和感を抱かず受け入れ、更なるドラマ化に期待をしているスポーツファン側にも当然問題がある。

まだまだメディアに期待を寄せるスポーツファンの存在は圧倒的に多いが、一部のコアなファンの中には、そのようなメディアによる演出に嫌気を感じ、メディアから離れていこうとしている人たちの存在もある。身体と同化でき、プロセスを楽しむ、「スポーツ」ファンタイプのファンである。彼らはインターネットの掲示板や自身のブログ上で、自らの意見を書き込み、スポーツやメディアに対するリアルな評価や分析を行っている。亀

田選手の試合に関して言えば、インターネット上では「ショーが見たいのではない！！ボクシングというスポーツを見たいのだ！！」などといったファンの声も多かった。ファンの存在無くして、スポーツメディアは成立しない。だからこそこのようなファンの存在が、メディアに対する意見を述べる「場」を作り出し、スポーツに対する意識を正すきっかけになり、スポーツを育てていってくれることを期待したい。



(図2 ファンの欲望の構図とメディア報道の関係)

第4章 スポーツジャーナリズムの今後

1. 終わりに

これまで述べて来た様に、スポーツは本来の意味から次第に変容してきた。それは、観て語るスポーツの誕生であり、つまりはメディアスポーツの発展であった。メディアスポーツは多くのスポーツファンにより支えられており、スポーツジャーナリズムは「より多くの情報がほしい」という彼らのニーズに応える形で成立している。それゆえ、人々の関心を引き付けようとメディアは様々な工夫を行う。そのうちのひとつに「ドラマ化」があり、メディア側としてはまるで映画や小説のようにリアルな感動ストーリーをつくり上げ、商品として、多くの人々に届けようとする。しかしこの演出が過剰になり過ぎたり、さらには歪曲に繋がったりすることがある。それゆえス

ポーツを通して様々な「ドラマ」が生まれる一方で、スポーツジャーナリズムは本来のジャーナリズムとしての機能を失いつつあると言える。

メディアがどうしてスポーツを過剰にドラマ化してしまうのか。それはその根底にスポーツファンの存在があるからである。メディア側の問題としては、メディアはスポーツを娯楽化・ドラマ化することで、スポーツに関心を持つ人の数を圧倒的に増やしたが、その背景には、スポーツをひとつの商品、つまり消耗品として扱っているという問題がある。つまり、スポーツを消耗品として扱っている以上、人気のないスポーツ、つまり商品として価値のないスポーツは、容赦なく切り捨てる。このようにして「メディアはスポーツを単なる消費財に変えてしまったのだ。」(『映画に学ぶスポーツ社会学』)さらに現在ではメディアの使命は、いかにスポーツをドラマチックに演出するかということに重点を置かれている。ゆえに挫折と成功を描いた涙を誘う選手物語やインタビュー、人間ドラマなどでメディアは過剰に人々の感動をおおる。メディアがドラマを語り、感動を商品に仕立て上げるのだ。

例えば、2006年3月に行われたWBCで日本が優勝した際には、当時話題となったイチロー選手の発言を、「イチロー語録」として各スポーツ紙が記事にした。特に日刊スポーツでは終面をイチロー語録に充て、印象に残る発言とそのエピソードを紹介していた。これは、試合内容の分析よりも感動的なセリフを取り入れることで、人々の感動を最重視していると言える。

しかしまた、スポーツ界側もメディアに依存している。スポーツはメディアによって確実にその存在感を増し、娯楽としての人気を集めることができた。例えば今ではすっかりメジャーなスポーツの仲間入りをしているカーリングやアーチェリーなどの競技は、メディアによって取り上げられなければあまり知られることは無く、認知度の低い競技のままだった。スポーツが成立するには、少なからずファンの存在が必要であり、そのファンを生み出す働きをしているのがメディアの存在である。また、W杯やオリンピックなどのスポーツ・イベントでは、スポーツ界側は商業主義とも言われるほど、莫大な放送権料やスポンサー料を

得ることができ、その収益でスポーツという事業は成立している。つまり、スポーツの認知度や人気を高めるためにも、資金を得て事業としてのスポーツを成立させるためにもメディアの存在は不可欠であり、スポーツ界はメディアに依存せざるを得ない状況に陥っている。

亀田兄弟の例に見られるように、選手に対する過剰な演出とイメージの利用により人々の関心を引き付けようとしたり、北島選手の例に見られるようにひとりの選手に固執し過ぎた報道をしてしまったり、単に認知度の高い選手を「ドラマ」の題材にすることで、「話題性」だけでファンを満足させようとする報道に陥りがちである。これではただつくられた「感動」が伝わるだけで、本当の意味での批評や分析がなされていない。また実際にはそれがなされていたとしても、あまりに「ドラマ」的な部分が前面に押し出され過ぎるため、批評や分析の部分が影を潜め、人々の視線がそこまで届かずに終わってしまうことも多々ある。

このように、メディア側が部数や視聴率を稼ぐため、コンテンツとして選手を扱うことは、視聴者に対して選手やそのスポーツに対する適切な理解を与えようとするとは言いがたい。またメディアへの露出機会が異なることは、そのままそのスポーツや選手に対する理解度の違いに繋がると考えられる。ボクシングに関して言うと、亀田選手をメディアが競って最強と語り、賛否両論あれど人々の間で亀田選手の知名度が上がる一方で、同じく若手の注目株であり、亀田選手とは対照的に、時間を掛け力を付けている名城選手の存在は、ボクシング通でないとは知ることではない。さらには、同じく世界チャンピオンで偉業を成し遂げている長谷川穂積選手の存在すらあまり知られることは無いという現状にある。これではスポーツ界に関する正確な情報提供が行われているとは言いがたい。スポーツ界のレベルアップのためにも、メディアはもっと客観的な報道を行うべきなのではないだろうか。

また、記者側のスポーツに関する知識やスキルの無さも、更なる「ドラマ化」を進めることに繋がってくる。つまり、そのスポーツに関する専門的な知識が欠けているため、分析や評論など出来ず「人間ドラマ」を描くしかその術を知らないの

だ。

また、スポーツ団体にもその責任はある。スポーツをビジネスとして成功させるためには、メディアと同様、それを支えるスポーツファンの存在が不可欠であり、そのスポーツファンを生み出すのに一番重要な役割を担っているのがメディアである。ゆえに、スポーツ団体はメディアにその広報や振興を依存する形で成立している。だから真偽はどうかであれ、亀田選手が他局では「疑惑の判定」と騒がれたにも関わらず、TBSに関してはそのように騒ぐことはないという事態が起こる。これでは決して正確な報道が出来ているとは言えず、スポーツ及び選手を育てているとは言いがたい。

その様なスポーツ団体とメディア側の原因に加え、スポーツファン側にもその要因はあると考えられる。メディアがスポーツを消耗品として扱っており、いかにドラマチックに演出するかということに重点を置いているのに対し、スポーツファン側にはプレイそのものに対する感動ではなく、その背後にある試合内容とは直接関係の無いエピソードなどの、まるで物語のようなドラマ性に期待し、それを無意識に消費し過ぎているという問題がある。「ドラマ」を求めるファンと、またファンが求めるからと、安易にドラマ化して報道してしまうメディア側にも当然原因はあり、双方の相乗効果により、スポーツ報道は過度にドラマ化してしまう。スポーツファンはもっとスポーツを観る目と技術を養っていくべきである。

「筋書きのないドラマ」などと言われるように、スポーツにドラマ的な要素が強いことが問題なのではない。問題なのはその報道自体がドラマ的に演出され過ぎていること、また皆がそのことに疑問を抱かなくなっているということなのである。また、試合内容に直接関係の無い人間ドラマばかりが前面に押し出されており、それにより「スポーツ」を書いた記事が影を潜めてしまっていること、評論自体が当たり前のようにドラマ的な表現をしていることも大きな問題である。最近の報道でも、まるで小説のような表現をしている記事が多く、とても報道とは言いがたい。

スポーツや選手に対する実質的な分析や評価、評論という意味では、新聞社の記者が書いている1面のメイン記事などよりも、中面の小さなス

ペースに掲載される元スポーツ選手の書いたコラムのような記事の方がよほど内容が充実している。もちろん、例えば元巨人の選手が書いた記事は巨人寄りの内容になりやすいなどといった問題点も見られるが、それでもドラマ性を最重視した、競技に対する知識の少ない新聞記者の書いた記事よりはきちんと選手やスポーツの分析、批評がなされている。

例えばデイリースポーツが2006年5月6日に掲載した、亀田興毅選手のカルロス・ファハルド戦後の具志堅用高氏の「興毅には日本人との対戦で試練積んでほしい」という見出しの付いた記事の内容は、的を得ていて説得力のあるものである。実際のところの亀田選手の本領が見えていないので、一定の評価を関係者やファンから下されている選手と対戦し、試練を積むことが大切だということが書いてあるのだが、この記事は痛烈なKOやTKOシーンだけを鵜呑みにし、亀田兄弟を最強と思いこんでいるファンに対しても、それを操作する関係者に対しても警告を促すものである。具志堅氏も協栄ジム出身だが、他の協栄ジム出身の元世界王者たちが亀田を最高と評価するコメントを寄せる中で、今ひとつという評価を下したのはこの具志堅氏ただ一人だった。さらに日刊スポーツは、12月20日に行われた防衛戦において、ボクシングの判定に最も重要視される有効打の数を数え、チャンピオンと挑戦者の比較をしていた。もちろん判定は有効打数が全てではないが、このように比較しその差を明らかにしていくことが、ファンもその結果に納得することに繋がるのではないだろうか。

また3月に行われたWBCに関して、日刊スポーツは2006年3月23日付けの終面丸一面を使って、「日本世界一!!良かった...で、終わってはいけない」と、球数制限や運営委員会、審判問題などの問題点と改善点をきちんと取り上げていた。今回の第1回大会では、MLB主導であるが故に、アメリカ優先の組み合わせやアメリカ人がアメリカ・チームの審判をするといった問題が多々生じた。WBCがサッカー・ワールドカップのような世界大会にまで発展するには、まだまだ改善を重ねていくことが必要であり、それをメディア側が指摘していくことが大切である。このような記事

をきっかけにメディアとスポーツ界がより良い関係を築いていくことを期待したい。

今後、マスメディアは企業全体としてその姿勢を変えていく必要がある。記者の知識不足という問題や視聴率や部数の実績を短期的に追求しているため、本当の意味で選手を育てているとはいえない現状等である。わが国でもアメリカのように、専門的なジャーナリストを配置すべきであるし、育てていくべきである。また、選手を単なる短期的に利潤を生むコンテンツとして「育てる」のではなく、もっと長期的な視点で育てていくべきである。さらにスポーツファン側も、無批判にメディアスポーツを消費することの危険性に気付かなければならない。単に感動的なドラマばかりを求め、メディアに期待するだけでなく、メディアに支配され意見を述べる「場」が存在しない状況に陥っている日本のスポーツ業界や、メディアについて、さまざまな意見を述べられる「場」を作り出していく必要がある。スポーツファンの知識向上がスポーツ界全体のレベルアップに繋がるとも考えられる。

ボクシング界について言えば、亀田兄弟の存在により、ボクシング界全体が一見人気を取り戻したかのようにも見えるが、逆に考えると亀田選手の試合以外は視聴率を得ることが出来ず、また試合の放送自体をしないなどといった事態に陥っているという見方も出来る。

やはり本当の意味でスポーツを育て、また発展させるためには、ミーハータイプのファンやアンチファンタイプだけでなく、「熱心」なスポーツファンの存在が不可欠であり、彼らのようなファンを「育てて」いく必要があるのではないだろうか。

インターネットの発展・普及により、最近では選手が自らのホームページを開設しており、何か重要な発表をする際にはマスメディアを介してではなく、自身のホームページ上でその発表をするケースが増えている。またファン側もインターネットの掲示板やブログで、試合内容やメディアについて意見を述べる機会が増大している。このことがマスメディアという企業が、今後の企業としての姿勢を見直すための良いきっかけになることを期待したい。

「ドラマ」を伝え、人々をスポーツに対して興味を抱かせることもメディアの使命のひとつである。しかし、そのことばかりに依存しては本来のジャーナリズムとしての機能は消えうせてしまう。実際に、スポーツ・イベントに関してその試合内容より、試合以外のエピソードのほうが記憶に残っていることも多い。例えば、今回のワールドカップでどこのチームが優勝したかということは覚えていなくても、ジダンが頭突きをしたことを覚えている人は多いだろう。もちろんそういった事実を伝えることも大切だが、このままでは、スポーツジャーナリズムはいかに評論・分析し、試合を伝えるかではなく、その周囲の物語性の強いエピソードばかりを取り沙汰するメディアにとどまり続けることになる。そのことをメディアは決して忘れてはいけない。今後、一部では存在しないとさえ言われているわが国のスポーツジャーナリズムを、選手やファン、そしてスポーツ団体とメディアが、メディアリテラシーとスポーツに対する正しい理解の下、共に築き上げていく必要があるだろう。

2. 今後の課題

本稿を執筆する上で、「正しい報道のあり方」とそうでないものとの境界線が非常に難しく、自分自身とても曖昧であった。人は確かに物語を求めるものであり、またセンセーショナルなもの、つまり「おもしろい」ことに興味を引かれるものである。しかし、だからといって話題本位だけの報道をすることは問題なのではないかといった疑問からこのテーマで研究を進めたが、まだまだ不十分な点も多かった。最後に、今後研究を進めていく上での課題について記したい。

- ・スポーツという「娯楽」の「適正な」報道とは何かの基準を明らかにする
- ・報道の「ドラマ化」を「適正でない」と考えられる報道のあり方のなかにどう位置づけるか
- ・取材や記事執筆の現場で、記者たちは「ドラマ化」を生むどのような力の下で仕事をしているか：スポーツ紙記者などへのインタビューや報道活動の取材
- ・取材や報道のあり方に対するアスリート側から

の意見の分析：アスリートのブログ分析やインタビュー

- ・スポーツファン側からの意見の分析：フォーカスグループ・インタビュー等

注

- 注1) 武市英雄・原寿雄責任編集『叢書 現代のメディアとジャーナリズム1 グローバル社会とメディア』, ミネルヴァ書房, 2003年
- 注2) 井上俊『スポーツと芸術の社会学』1章「文化としてのスポーツ」, 世界思想社, 2000年
- 注3) 井上俊前掲書 p.11 エリアスの定義
- 注4) 渡辺潤『スポーツ文化を学ぶ人のために』3章「スポーツとメディア—アメリカのプロスポーツを中心に」, 世界思想社, 1999年, p.73
- 注5) 井上俊前掲書, p.22

参考文献

- ・天野勝文・松岡由綺雄編『現場からみたマスコミ学II』, 学文社, 1996年
- ・井上俊『スポーツと芸術の社会学』1章「文化としてのスポーツ」, 世界思想社, 2000年
- ・金子達仁『ノンフィクションを書く!』「インタビューは精神のストリップだ」, ビレッジセンター出版局, 1999年
- ・亀山佳明編『スポーツの社会学』世界思想社, 1990年
- ・杉本厚夫『映画に学ぶスポーツ社会学』, 世界思想社, 2005年
- ・杉本厚夫編『スポーツファンの社会学』, 世界思想社, 1997年
- ・関春南・唐木国彦編『スポーツは誰のために—21世紀への展望』, 大修館書店, 1995年
- ・多木浩二『スポーツを考える』, ちくま新書, 1995年
- ・武市英雄・原寿雄責任編集『叢書 現代のメディアとジャーナリズム1 グローバル社会とメディア』, ミネルヴァ書房 2003年
- ・田村紀雄・林利隆・大井眞二編『現代ジャーナ

リズムを学ぶ人のために』, 世界思想社, 2004年

- ・西村欣也『新聞なんていない?—記者たちの大学講義』3章「球界再編とメディア—スポーツライティングの立ち位置」, 朝日新聞社, 2005年
- ・橋本純一編『現代メディアスポーツ論』, 世界思想社, 2002年
- ・アンドリュウ・ブレイク, 橋本純一編『ボディ・ランゲージ—現代スポーツ文化論』, 日本エディタースクール出版部, 2001年
- ・満田久義・青木康容編著『社会学への誘い』朝日新聞社, 1999年
- ・渡辺潤『スポーツ文化を学ぶ人のために』3章「スポーツとメディア—アメリカのプロスポーツを中心に」, 世界思想社, 1999年
- ・巨英太郎『ジャーナリズム「現」論 取材現場からメディアを考える』世界思想社, 2004年

参考サイト

asahi.Com
 MSN 毎日インタラクティブ
 スポーツナビ
 NIKKEI NET
 デイリースポーツホームページ

記事

2006年8月15日発行分	朝日新聞
2006年9月27日発行分	朝日新聞
2006年8月3日発行分	日刊スポーツ スポーツニッポン デイリースポーツ サンケイスポーツ
2006年11月14日発行分	スポーツニッポン 日刊スポーツ デイリースポーツ サンケイスポーツ
2006年12月20日発行分	日刊スポーツ スポーツニッポン デイリースポーツ サンケイスポーツ
2006年3月23日発行分	日刊スポーツ
2006年2月26日発行分	日刊スポーツ

2006年10月29日発行分	朝日新聞	html
2006年3月22日発行分	日刊スポーツ	http://www.remus.dti.ne.jp/~i-nao/hodaiA80.html
	スポーツニッポン	http://www.aki-kaori.com/akilog/item/128
	デイリースポーツ	http://roshiana.9.dtiblog.com/blog-entry-40.html
2005年6月20日発行分	朝日新聞	http://news.livedoor.com/topics/keyword/3162/
	スポーツニッポン	http://sports9.2ch.net/test/read.cgi/boxing/1168019675/
2006年4月21日発行分	日本経済新聞	http://tbskameda.blog55.fc2.com/blog-entry-1.html
	朝日新聞	
2006年5月4～11日発行分	デイリースポーツ	http://asatsuno.jugem.jp/?eid=162

表2の参考サイト

<http://yumataro.iza.ne.jp/blog/entry/107371>
<http://www.kaokab.jp/ranking/kaokab%20news/kameda-kouki02.html>
<http://www.keyrobo.com/kw307.html>
<http://www.kaokab.jp/ranking/kaokab%20news/kameda-kouki03.html>
<http://www16.plala.or.jp/tagatame/homepage/japanese/kameda.html>
<http://www.bk1.co.jp/product/02647435/?partnerid=02dena01>
<http://d.hatena.ne.jp/kazuct/20061221/1166710154>
<http://blogs.dion.ne.jp/calcio/archives/4245877.html>
<http://r25.jp/index.php/m/WB/a/WB001120/id/200511171112>
<http://kouki-fan.com/>
<http://sakkizakki.exblog.jp/4266577>
http://voice.fresheye.com/lcat/2006/08/post_204.html
<http://b.hatena.ne.jp/entry/http://www22.tok2.com/home/kameda0802/>
<http://green-ts.at.webry.info/theme/04bafa9a80.html>
<http://blog.kansai.com/halca/2322>
http://news.fresheye.com/topic/6000068/?from=rss_human
<http://nakama3.seesaa.net/article/32185438.html>
<http://www.blognavi.com/entry/a/8f/81039.html>
<http://pointsite.livedoor.biz/archives/50891203.html>
http://www.k4.dion.ne.jp/~a_box21/column/20060803